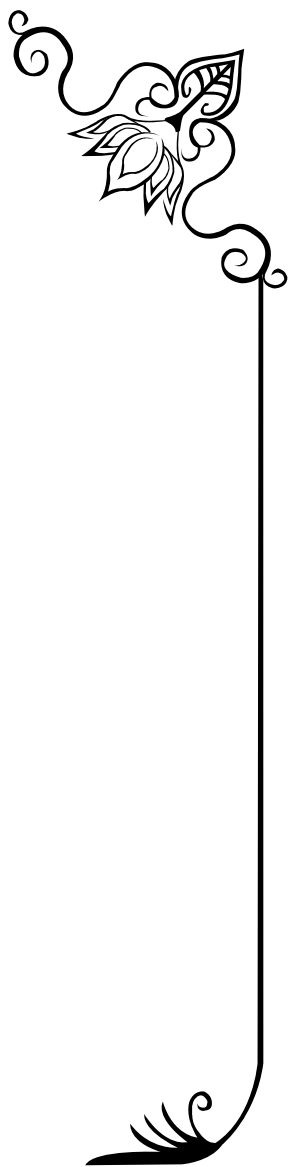


第二章



十九世紀中葉の太原府の商業地区は賑わいを極めていた。ここ数年は南方の太平天国（一八五〇—一九六四年）キリスト教の信仰と反清の革命思想に基づき独立国を宣言した農民反乱集団の乱の影響で商業が深刻な打撃を受けてはいたが、街は華やいだ人々の群で賑わっていた。きらびやかな服をまとった土地持ちの富裕層と顔色の悪い飢民が一緒くたになって、百年続く商店街で肩をすりあわせきびすを接し、河の流れのように絶えることなく流れていった。

久しぶりに遠出をした雪瑛は、何もかも物珍しく、男のように気ままに動き回れないことが残念でならなかった。そこへ致庸が自分の荷袋から黒っぽい織り出し模様のマントを取りだして渡してくれた。雪瑛は願ってもない申し出に胸がはずんだが、やはりかぶりを振った。

「致庸、ふざけるのはやめて。早く行って勉強してらっしゃいよ。試験に遅れちゃだめよ」

致庸は物思わしげに口を噤んでいる。少し心配になってその背を押すと、致庸はからからと笑いだした。

「雪瑛、きみってどうしてそんなにまじめなんだい？ 考えてもごらんよ、万一わたしが拳人に受からなかったら、兄さんと嫂さんはどうすると思う？」

雪瑛はハツとしたが、すぐに言わんとしているところを察した。

「つまり、あなたがもし合格しなかったら、お兄様とお嫂様はあきらめて、もう科挙を受けるとは強制しなくなる。わたしたち二人のことは……」

「その通り。兄さんと嫂さんは拳人に合格して進士にならない限り、江家との婚礼の話は進めてくれないと言っているけど、そんなの脅しだよ。もし落第したら、ほんとうに結婚話を止めてしまうと思うかい？」

雪瑛はぼっと赤くなつて決まり悪げに言った。

「まあ、それってつまり、あなたが合格したら、わたしたちが結婚にこぎつけるまでにはまだまだたくさん紆余曲折を経ないといけないけれど、もし合格しなかったらわたしたちは――

致庸は意を得たりとうなずくとニヤリと笑った。

「そうだよ、わたしが話した将来の日々について考えてみなかった？ もし不合格だったらあいつた日々がすぐにやっつて来るけど、逆に合格したら、きみはまだずっと待たなきゃならない。どうだい、だったら合格しない方がいいだろう？」

雪瑛はちよつと考えこんだが、すぐに嬉しそうにマントを着込んで見目麗しい若者に変身した。致庸と雪瑛は目を見交わして大いに笑い、手を取り合つて以心伝心、新しい決定に胸を躍らせた。

その時突然馬車が停まった。中から致庸がどうしたと尋ねると外から長栓が答えた。

「若旦那様、この先でだれか喧嘩しています。道がふさがれています」  
致庸は雪瑛が子どもころ好きだった影絵芝居に連れて行くかと思っていたので、手を振って言った。

「ちよつと回り道しよう、影絵芝居の小屋に行ってくれ」

「若旦那様、それはだめです、旦那様のお言いつけです。太原府たいげんぷに着いたらまっすぐうちの店舗に行けど——」

致庸ちようは馬車の中で顔をしかめて怒鳴った。

「煩いぞ、將軍だつて外では君命に従わないこともあるさ！ 早く行けよ、影絵芝居の小屋に着いたら、おまえはどっかで一寝入りしてくれればいい。夜が明ける前に雪瑛せつえいさんを祁県きけんに送って行ってもらうからな」

長栓ちようせんはフンと鼻を鳴らすと嫌々応じた。

「わかりましたよ、でも……旦那様がお咎めとがになったらちやんと庇かばってくださいよ！」

致庸ちようはケラケラ笑うばかりで返事をしない。雪瑛せつえいはうつむいて微笑んでいる。いかにも幸福そうなその顔に思わず致庸ちようは見とれた。

前方の遠からぬ所では、落花生の袋をかついだ孫茂才そんもさいが車夫と派手に喧嘩をしていた。旅やつれた茂才もさいは地団駄じだんたを踏んで怒りまくっている。

「車引きの分際で、よくもおれにそんな口がきけたな。先にぶつかったのはおまえだろうが！」

御者もむろん負けてはいない。物凄い勢いで馬車から飛び降りて来てくっつかかった。

「車引きだから何だつてんだ、てめえだつて落花生売りじゃないか！ そっちこそぼうつと歩いていくせに！」

ふたりは互いに譲らず益々激しい言い争いになり、野次馬が人垣を作りだした。この時、くだんの馬車から一人の若者が飛び降りて来て茂才もさいに向かって拱手きようしゅすると、よく響く声で言った。

「うちの家人が失礼いたしました、あなたにぶつかるとは——」

御者はそれを聞いて慌てた。

「わ、若様、この野郎、うちの車がぶつかったって難癖をつけてやがるんですよ！ どう見たつてぶつかってやしないのに！ もしほんとうにぶつかったんだとしても、たかが落花生売りじゃありませんか、それがどうしたつて言うんです？」

茂才もさいはカツとなり、御者の鼻先に指をつきつけた。

「きさまのような犬っころに人間様の価値などわかるものか！ おれは山西祁県さんせいきけんの生員せいゐんだぞ！

太原府たいげんぷに郷試きやうしを受けに来た秀才だ！ ちくしよめ、落花生売りだとしても、ぶつかつておいてただで済むと思つているのか？ おまえの旦那様のご意見を伺おうじゃないか！」

そう言つて目を上げた茂才もさいは、目の前にいた「旦那様」のただならぬ美貌に思わず息を呑んだ。陸玉菡りくぎくかんという名の美しい「旦那様」は、その言い種を聞いて茂才もさいを上から下まで打ち眺めた。粗末な木綿の服を着て、長年の失意に鬱屈うらくくつした顔は怒りに歪んでいたが、眉宇びうには明かな教養のきらめきがあり、卑下と自負とがめまぐるしく取って代わるその顔は、たとえ足を踏み鳴らして人を罵ののつていても、複雑な文人の気質を覆い隠すことはできなかった。陸玉菡りくぎくかんは馬車の中から見かけた時からすでに驚きを感じていたのだが、こうしてじつくりと観察してみても、驚きがつのはなし。

「大兄たいけい、うちの家人が失礼をいたしました、どうかわたくしの顔に免じてご容赦くださいまし」  
「フン。まあ、そんなところだな。わかつたわかつた、弁償しろとまでは言わないが、せめて落花生を買つてくれ！」

玉菡ぎくかんがほかんとしていると、御者が再び怒鳴りだした。

「き、きさま、つけあがりやがつて、この上商売しようつて気か！ それに秀才だと？ 世にも不思議なことがあるもんだ、落花生背負つて試験を受けに行く秀才がいるとはな――」

――」  
 秀才が再びカツとなり、陸玉菡りくぎょくかんは急いで車夫を手まねで黙らせた。玉菡ぎょくかんは素直に一綴りの錢を秀才に渡すと馬車を出させた。

秀才は呆然ぼうぜんとなり、二歩追いかけたところで足を止めた。錢綴りから幾らか取りだすと後ろにいた担ぎ売りに渡す。

「まず肉まんを幾つかくれ。祁県きけんから太原府たいげんふまで一日中歩き通しだつていうのに、腹の中は空っぽなんだ！」

野次馬たちはゆっくりと散つていき、通りすがりの被災民は、秀才が手にした肉まんに思わず喉を鳴らした。